キノコ雲の下の体験

語り手　鈴木容子
沼袋四丁目

私の原爆体験は前日八月五日から始まる。当時、私は小学校二年生。学校ではほとんどが疎開しており、私も母の郷里、山口県の高森に縁故疎開していた。

ところが姉（登美子）が淋しいとかで迎えにきて、この時私を家に連れ帰った。何ヵ月ぶりかの家族団欒。うれしくて、はしゃぎまわったのをよく覚えている。

しかし、いま考え合わせると、なにかの前ぶれのようなできごとであった。

＊　＊　＊

まず、風呂に入った時のこと。

入口で何かが胸にスーと引っかかった。

当時の、傘がつき、ワット数も低く、薄暗い電灯では、なにに当たったのか判らないが、横に五センチぐらい切り傷をしてしまった。たいした傷ではなかったので、母が絆創膏を貼ってくれたが、その傷あとが今も残っている。

その二は、父との最後の会話。

それまで父とふたりで話をするということがなかったのに、この日、強制疎開で跡かたもなくなっている前の家に行き、空を見上げて星の話をした。

当時は街の延焼を防ぐために、家を何軒か取り壊して、空き地がつくられていた。当時は勤労奉仕で、皆で家を倒した。私たちの家も跡かたもなく取り壊された。

父との思い出は、その事が残るのみ。北極星、北斗七星の名が、強烈に記憶に残っている。

その三は、寝る前に母が蚊帳を吊っていたときに起きた。部屋のかもいに蚊帳の輪をかけて廻っていた時、〈バシーッ〉と音がした。なにか判らないまま、その夜は休んだのだが、翌六日の朝、鏡のおおいを上げた母が、「アーッ」と言ってすわりこんでしまった。鏡が縦に真っ二つに割れていたのだ。母は「嫌な事だね」とひとこと言ったきりだった。

＊　＊　＊

八月六日。朝食も終わり、父は「勤労奉仕」に、次兄、三兄

はそれぞれ兵器作りに、学徒動員にと出かけた。
八時十五分。姉は二階で掃除、母は物置の屋根のトーガラシに水をかけていた。
私は遊びに出ようと家を出たとたん、〈ピカッー……ドーン〉と、強烈な光と爆風に身体を吹き飛ばされ、家の陳列棚の間に痛いほどぶつかって下敷きになった。しばらくじっとしていたが、胸が圧迫されて、苦しくて、少しずつ動き何とか外に出た。
二階から姉の大きな声が、「お母さーん」「ようこー」と叫んでいる。見れば、階段が落ち、下りてこられない。持ち上げようとしたが重くて、私の力ではビクともしない。姉はブラ下がって飛び降り、足を痛めてしまった。母のいた物置はつぶれ、ガレキの下から呻き声が聞こえる。
姉が気が違ったように掘り始めた。私も手伝ったが所詮女と子供の力、なかなかはかどらない。外を通る人に「助けてください」「助けてください」と取りすがって頼むが、皆自分のことでいっぱい。一人、兵隊さんが「あとから来るから……」と言ってくれたが、それっきりだった。
母の所にもどると、首が出ていて、姉がピシャピシャと頬を叩き眠らせないようにしていた。どれぐらいの時間がたったか、母をやっと掘り出した。母は顔の半分と胸の全部に火傷を負い、アゴが切れてぶら下がっている。もう血は出切って変色し、これが母とは思えないほどボロボロになっていた。悲しかった。
なにも持ち出すことも出来ず、三人で日赤病院に行った。そこには横になった人、焼けただれて茫然と立ちすくむ人、無傷の人は見当たらない。
治療を待つ人の長い行列。母の番はなかなか来ない。母は自分で服をちぎり、アゴを持ち上げグルグルと巻き付けた。（後日、その傷はズレてついて、アゴが段になってしまった）火傷の治療も受けられないままだった。人がバタバタと倒れていく。
母は大変気丈な人で、自分のことより父のことを心配し、あちこち探し歩く。後刻、父はからだ全体に火傷を負い、歩くのがやっとという姿で、私たちの待つ家にたどりついた。出る言葉は「熱い、熱い」「水、水、水」。皮膚は赤くただれてぶら下がっている。こんな人がゾロゾロという有り様。まるでユウレイ。
やがて、炊き出しの車がきて、おにぎりを渡しはじめた。手に持てない人が私に、自分の服に入れてほしいと言うが、実際にはなにも身に着けていない。自分の皮膚がぶら下がっているのをひっぱって、この中に……、言うとおりにした。目に焼きついてはなれない。
だんだん小さくなっていくが、水、水、水……、熱い、熱い……の呻き声。
突然私の家から火が出て、瞬く間に火の海となっていった。夏の暑さに加えて、この熱気。火傷の人の声が一段と悲痛にな

る。

家の中には犬のエスの子供が五匹。他では人がまだ下敷きのまま。どうすることも出来ず、ただ見ているのみ。無力さに誰もがやりきれない思いをした。

あそこに○○さんがいる！、あっちに××くんがいる！、が、ただ涙するばかり。後日、人の話では、〝炭〟のようになった人がいっぱいであったとか……。生きたまま死んでいった……地獄です。

次兄が無傷で私たちと会えたのは夕方だったと思う。このままここにいても、どうしようもない。三兄を待たず、意を決して、母は私がいた故郷の高森へ向かうこととした。

まず、鷹の橋口から己斐（こい）に向かう。途中で近所の坂口さんのおじさんに出会った。お互いの家族の消息を話し合い、三兄のことをお願いして別れた。

何度も川を渡るが、どの橋の下にもプカプカと人が流れている。どの川も階段のところには、水を求めて、身に水をかぶる人、飲む人でごった返し、なかにはそのまま水に流されていく人もあった。行き交う人は皆ボロボロ。裸かそれに近い。どこまで歩いても同じ状態。この時子どもの心にも、ものすごい爆弾が落ちたんだなと感じた。

倒れかかる父を兄と姉が支え、二日市辺りまでトボトボ歩く。夜になり、広島の街が真っ赤に見える。もうこれ以上父を歩かせるのは無理というところまで来た時、ちょうどトラックが人を乗せていた。

それになんとか乗せてもらう。私が犬を抱いていたら、「犬なんか捨てろ！」と言われたが、ギュッと抱きしめていた。このエスはそれから三年七カ月生きて、母の初七日に後を追った。

真夜中に高森についた。お祖母様、叔父様、叔母様に温かく迎えていただいた。この時ほど親戚のありがたさを味わったことはない。父はお祖母様の二階に、母はその真下の座敷に寝かせられ、献身的な介抱を受けた。

真夏なので火傷にハエが卵を生みつけ、ウジがわく。皆でそれをハシで一匹ずつ取るがイタチゴッコ。馬の油が火傷によいとかで、当時なかなか手に入らなかったそれを塗っていただいた。有りがたかった。

そんななか、半分あきらめていた三兄が疲れはてた姿で帰って来た。どんなに喜んだ事か。父の呻き声は四日間中続いたが、ふと母が、父の声が聞こえないので見て来るようにと言う。父は息を引き取っていた。母は感じとっていたのでしょう、目から涙のすじが続いていた。

「人間五〇年、下天の内にくらぶれば夢幻の如くなり」いつも父が口にしていた通りの五〇年の人生だった。

翌日父の葬儀。座棺といって、よく時代劇で見る丸い棺桶に入れられた。蓋が閉められないので、次兄が泣きながら首の骨

を折る。〝ガクッ！〟音が耳についてはなれない―。

熱い熱い、水、水、で四日間苦しみぬいた後の死。楽になって、父にはよかったのかもしれないと思った。

その後母は、戦地に行っていた長兄（孝敬）の無事を祈るため、毎朝早く巳斐の山に向かっていた。高森に居た一年の間にこの長兄も帰って来たが、後年この兄は四五歳の若さで死亡。

＊　＊　＊

一年後広島に帰って来た。

叔父様の手作りの家。バラックの多い中で本格的な家であった。母は空き地を利用して畑作りをした。耕す土の中から骨がバラバラ出て来る。その骨を一か所に埋めて手を合わせる。あちこちにそれが出来る。まるで墓場のように。そしてどういうわけか、ものすごく大きく甘いカボチャやイモが出来た。食料難の時、これは有りがたかった。イモズシなるものを食べたのもこの頃であった。

働き者の母は何でもこなす。戦前母は毎朝日本刀の手入れをするのが日課で、懐紙を口にし、ポンポンと〈タンポ〉で刃をたたいていた姿が忘れられない。焼け跡から出てきた焼けた刀を大事そうに紙にくるんでいた。その母も二四年三月一日死亡。その日の朝、学校に行く私をじっと見つめ続けた。その前から、父が迎えに足元に来ていると言い、自分の死が近い事をさとっていたようである。

姉も母の死の年、九月二五日、たった二五歳の若さで、下痢をしたり、髪の毛が抜けたり、歯ぐきから血を流したりで、身体が半分になって死亡。一年に二度の葬儀でした。

十三歳で、両親と姉との別れです。

その後次兄が親代りとなって、私を中・高・短大まで行かせてくれた。当時は、両親が揃っていても高校進学も贅沢といわれていたが、兄の犠牲のうえに考えられないほどのことをしてもらった。今考えると、兄は、両親に別れた私が女でもあり、将来起こるであろう被爆差別を強く生きられるようにと考えてくれたのではないだろうか。

現実に、広島出身と聞くと先ず、被爆したか、白血病になる、小頭児が生まれる、しまいにはうつるのでは…という非常識な対応をされ、私はその時以来、広島出身ということを言わなくなった。悲しいことであるが、そうせざるをえなかった。

ここからは話したくない。「ヒロシマ、ヒバクシャ」からの逃避です。

＊　＊　＊

私は現在素晴らしい主人と出会い、二人の子の母となっている。しかし、この子ども達も被爆二世手帳を持ち、被爆はどうしてもつきまとっている。長女を出産する時、恐ろしさでお腹から出さないようにという気持ちでいっぱいになったこと。先生に、「頭は？　身体は？」「何も問題ない」の一言でドーと涙

があふれ出た。長男の時も同じだった。

この子たちも、長女は看護婦、長男は高校教師。被爆という二字を背負って生きている。常に被爆二世という現実を受け入れて、何がどうなのか自分なりに考えて生きていくようにと話している。

＊　＊　＊

人間のする事にはおろかな事が多すぎます。先頭に立つ人、特に権力を持った人は、時に狂気と思うことも平気で行ってしまいます。自分の身に降りかからなければ、多少の犠牲は考えない。利益優先の世の中、核を使って便利になった分、それ以上の破壊を促していることがわかっていても行う。核が国の力の均衡を保っているなんてナンセンスですが、実際大国の力関係は核の量で行われていることも事実。

地球は確実に破壊される道に向かっているとしか思えません。どこかが狂ったままでいる。人間の良心を信じてよいのかどうか……。

＊　＊　＊

私には今も許せないと思っている事がある。

戦後広島に帰り、千田小学校にもどったとたん、比治山にあるＡＢＣＣという所から迎えが来て、私と友達の一人が連れて行かれ、髪の毛から足の爪まで調べられた。被爆者とそうでない者との比較だったと思うが、真っ裸にして写真を撮られることが何年が続きましたが、結果は何ひとつ知らされていない。あの時の私は、左側の首のリンパ腺が腫れており、長い間にコブのようになって、首のつけ根の所で、膿が皮をやぶり出て来たのだが、しかしそれも「あ、そうですか」で終わっている。アメリカのモルモットとして研究されていたとしか思えない。

小学生だったのでどういうルートで、どう扱われていたのかさっぱり分からずじまい。何とも人を馬鹿にした扱いです。

後日新聞で、あの原爆は実験のために日本が末期状態の時に行われたという記事を読んだ時、やっぱり……と、頭がツーンとして吐き気がした。人間を実験用に使った。

＊　＊　＊

どう怒ればいいのでしょうか。どこに気持ちをぶつければいいのでしょうか。

そして今も尚、あちこちで核実験の被爆者が出ています。

地球が物を言うとしたら人間はいらないと言うのでは……。

ノーモア広島。ノーモア被爆者。言葉だけになりそうです。